JAITI 32

Japanese Agricultural Inservice Training Institute Foundation

◆URL http://www.jaiti.org/ ◆E-MAIL jaiti@janis.or.jp

JAITIとは、「財団法人日本農業研修場協力団」の英文、Japanese Agricultural Inservice Training Institute Foundationの頭文字の略で「ジャイチ」と呼びます。1989年、農業を生活基盤とする、開発途上国の農村地域社会の人々が、「生きる根幹」の食料を安定確保することで、生活の中に基礎的な教育と公衆衛生に目を向けるゆとりを持ち、健康で、自立心豊かな地球上の「友」になることを願って、活動が展開されています。

発　　行　財団法人　日本農業研修場協力団
事 務 所　〒386-0502　長野県上田市武石沖605-5
TEL 0268－85－3465　FAX 0268－85－3583

今日のジャイチ

前号でご報告したように、ネパールで展開する学校事業の自立経営は、当初の予定にそって着々と成果をあげています。同じように、日本にある財団法人ジャイチも、小林・菊池前理事長から引き継いだ体制を、自立に向けて再構築しているところです。

この半年間、理事協議会をたびたび開催し、担当を決めて業務に取り組みました。平行して、ネパールにおける事業（学校、農場）は、従来通り、カトマンドウにあるジャイチネパール株式会社の社長菊池健介氏によって運営されることを確認しました。日本の財団としては、ネパールに設置した学校の経営が自立するまで、少なくとも今後六年間、資金支援を継続しておこなうことを主目的といたします。そのために、従来通りニュースレターを発行し、これを通じて全国の皆様から浄財をいただき、同時に、基金を金融資産として運用することによって、使命を果たしたいと考えております。

スタートにあたり、財団法人の基金およびその運用状況を含む会計監査を、今年度より財団監査役にご就任いただいた公認会計士小山秀喜氏によって実施中です。そして、ネパール事業への資金的支援の責任を全うするために、常勤スタッフの廃止を決定しました。合わせて、小林、菊池ご両家のご好意で設置しておりました従来事務所も、自立のキーワードに沿いまして、昨年末に三百メートルほど離れた新たな場所に移転いたしました。

ネパールへの支援を中心に立ち上げられた財団法人ジャイチですが、今後は、視野をその他の途上国、国内の農山村に広げて、新たな支援関係を追求するという課題を、これまでの関係者から頂いております。もちろん、ジャイチ（日本農業研修場協力団）の名前が示すように、活動の基盤を農山村、農林業の振興に置くことは変わりません。

皆様のご助言をお持ちしております。そして、さらなるご支援とご参加を賜りたく、よろしくお願いいたします。

（猪爪）

㈶日本農業研修場協力団組織図

理事会 ― 評議員会

日本事務局

ジャイチネパール株式会社

ネパール事務局

パシファント学校

カカニ実験研修農場　カカニブライター学校

ネパール事情

マオイストと政府の争いがはじまる前の話をしますと、農村から都会へ出稼ぎに来ている人たちは、ビンズー教の一番のお祭り（ダサイン・ディパワリー）の時はほとんどの人が実家へ帰り街は静か（さびしく）になるのでした。マオイストのテロ問題が起きてからは、農村は住みにくくなってたくさんの人たちが都会に避難してきました。そして、出稼ぎにきている人たちもお祭りの時、実家へ帰れなくなっていたためダサイン・ディパワリーの時、都会がすごくにぎやかで農村はさびしかったのです。

しかし、昨年のダサイン・ディパワリーは違いました。カトマンズ市は静かでした。今回多くの人たちが久しぶりに実家へ帰ることが出来たようです。この事は国の治安、政情が良くなったことの表れでしょう。

この長い内戦で、ネパール人は疲れています。また、ネパールは経済的にさらに貧しくなったことは明らかです。しかし、これで多くの国民は目覚めたと思います。

現在、マオイストと政府が新しい政府樹立のため時間をかけて交渉をしています。

これからは良い方向へ向かって国の開発を進めることを期待しています。また、この頃は観光客の訪れも以前より多くなっています。

（マン）

The Rising Nepal

Leaders declare end of conflict

Law to punish violence in all forms: Accord

SURE SIGN OF PEACE

PM reiterates his resolve to hold CA polls

Peace accord exemplary: Prachanda

▲The Rising Nepal
昨年11月に主要の政党とネパール共産党毛沢東主義派（マオイスト）との包括和平協定が調印されました。十数年に渡る内戦に終止符が打たれ、暫定政府が発足しました。マオイストの武装解除は順調に進むか、本年6月の選挙、王制のことなど、行方が注目されます。

地区教育担当官（DEO）

バシファント学校を視察

外国の支援組織によって、ネパール国内に建てられた学校はたくさんあります。先進国と貨幣価値が違いますから、建てるのはそれほど困難ではありません。しかし、それを地域の子どもたちのために末永く維持するということはなかなか困難です。その結果、ネパール政府に学校を引き取って欲しいという申し入れがたくさん集まって、政府も困惑しているのが実態のようです。

学校経営を地元に移すことによって永続性を持とうというジャイチのやり方を把握するために、過去五ヶ月にわたって教育省の高官たちがバシファント学校を視察したのも、こうした背景があってのことと思われます。その結果、高官たちの反応や評価はきわめて肯定的でした。その過程で、ネパールジャイチの責任者であるピム・ラル・グルンさんはバシファント学校を監督する立場にある地区教育担当官（District Education Officer）を学校に招いて、ジャイチの方針を説明しました。その後、地区教育担当官であるマナカジ・シュレスタさんは、バシファント学校の学童たちに対して教科書を無償で支給するための支援策をたいへん熱心に追求してくださっています。これはジャイチにとって非常によいニュースといえます。

◀学校訪問時の写真。左から2人目がマナカジ・シュレスタ地区教育担当官、右から2人目がグルンさん。

なお、グルンさんはネパールのスポーツ・教育省の局長を退職し、現在はネパールジャイチの責任者であり、ネパールユネスコ事務総長も兼任しています。このことがネパールジャイチと教育省との関係をたいへんよいものにしています。

イチゴでカカニは村おこし先進地に

ネパールにはさまざまな技術研修のために研修生を海外に派遣する動きがあり、現在も続いています。一旦海外に派遣された研修生は、研修で習得した技術を伝えるために地域に戻ることはほとんどありません。研修生の一部はそのまま海外に留まり、帰国さえしないことが多いのです。こうして、国はもとより他のさまざまな支援機関は、多大な金銭を失うとともに、多くの時間を無駄にしています。

このような事態を踏まえて、ジャイチは別の方法を模索しました。つまり、研修生を海外に送るのではなく、日本の専門家を現地に直接派遣して、より多くの人たちに自分たちの生活のかで学んでもらうようにしたのです。ジャイチは、その事業をまず農業部門から始めました。ある村に実験農場を開設し、六年近くの間に、百種類以上の作物について試作を続けました。その地域の気候や土壌に適した高付加価値の作物を特定するためには、このような実験が不可欠だったのです。実験期間中、ジャイチは地元の農民を雇用し、研修生として賃金を支払い、農場におけるあらゆる農作業に従事してもらいました。

▲卒業生のナニマヤバル先生がバシファント学校で教える。

そこでは、改良された耕作方法を採用しましたが、農機具や材料は厳格にその土地のものに限定しました。地元の農家が自分たちの土地でやり始めたときに、新しい農機具を買わなくてもすむのです。この方法によって、ジャイチの農場での実験成果は、とても早く普及し、地域全体の農業を変えました。

長い実験の最終的な成果は驚くべきものといえましょう。カカニ地域は、果物の王様であるイチゴが栽培できる土地柄であることが判明しました。ジャイチの農場で大量生産のためのイチゴの苗を生産したのは、一九九四年のことでした。この時点までは、農民たちは農場の活動をただ見守っているだけでした。農場に苗を移植した後、ジャイチは残った苗を地元の農家に無料で配布しようとしました。しかし、地元の人たちは自分たちの畑でそれを育てるのを嫌がり、誰も「そんなものはいらない」といいました。

ところが、ジャイチが初めて大量のイチゴを収穫し、農場でキロ当たり二〇〇ルピー（三米ドル）の価格で販売してみせると、農民たちはショックを受けました。果物がそのような値段で売れることは彼らの想像を超えていたのです。最初の頃、カトマンドゥ市内でのイチゴの販売価格は、キロ当たり六〇〇ルピー（九米ドル）でした。そして現在でも、最盛期のシーズンには、キロ当たり三〇〇―五〇〇ルピー（五米ドル）で売れています。ネパールではキロ当たり一〇〇ルピー以上で売れる果物などありませんから、誰もがこのことに驚

▲大根洗い。農村ではよく見かける風景。もっとも消費の多いやさいで品種は日本の美濃早生系大根がほとんどを占める。

きました。

これがネパールにおいて、イチゴが商業ベースで栽培されたまさに最初の事例となりました。

当初は、自分の畑で育てるために、農民は苗を農場から買いました。しかし、かつての農場の研修生が、地元で技術を教えるインストラクターになって、さまざまな指導や助言をしたので、今では、農民自身が苗を自力で育てています。現在では四百軒近くの農家が商業ベースでイチゴを育てています。いま、カカニ村では、イチゴの販売だけで年間六〇〇万ルピー（一千万円）の現金収入があります。

イチゴ以前には、カカニ地域の主な換金作物は大根と蕎麦であり、その収入は最大でも五〇万ルピーがやっとでした。イチゴ生産のおかげで農業収入が十倍以上に増えたので、人々はこの村をイチゴ村と呼ぶようになりました。

村の生産と収入を維持するために、ジャイチは現在でも常時、品質管理と市場管理をしています。全ての農産物は結局のところ市場管理が不可欠であり、それがないと生産に対する投資のリスクがふくらむからです。

ジャイチは、農民の視線のなかに入る方法でデモンストレーションをしたので、農民自身の自己改革を促しました。今では、ジャイチの農場が出す農業に関するどのような指示に対しても、農民たちは率直に受け止めてくれるようになりました。

現在、村人たちはジャイチが開設した授業料有料のカカニ学校に子弟を通わせることに熱心です。

▶カトマンドゥの青空市場。市内のいたる所で見ることができる。品目は豊富で日本で目にするものが多い。

ネパール農業報告

―カカニ、ナムター地区―

㈳国際農林業協力・交流協会（JAICAF）のご理解、ご支援をいただき当団の財政負担なしで数年続きました。私もこの指導に携わり五年が経過しました。今回は引退を考えていましたが、マン事務局長のすすめもあり継続することを決め、九月から十月にかけて行ってきました。

◆ナムター村と周辺地区

アブラナ科やさい（キャベツ・カリフラワー・大根、アブラナなど）の産地ですが、アブラナ科特有の難病害であるネコブ病に悩んでいます。一昨年より日本で育成されたネコブ病抵抗性品種を持ちこみ試作を開始、効果が大きく喜ばれている所ですが　①種子価格が高い（日本では問題になりませんが）②品種対応では効果のないネコブ病出現の可能性　③病原性の強い菌密度増加の懸念　④知的財産保護の観点から関税との指摘などから日本で広く行なわれている総合防除対策について取り組みを始めました。

具体的には　①アブラナ科のみ発病する病害であることからバレイショ（ナス科）イチゴ（バラ科）スイートコーン（イネ科）インゲン・エンドウ（マメ科）ほうれんそう（アカザ科）ウリ類（ウリ科）人参（カラカサバナ科）などの栽培に取り組み始めました。②また土壌酸度が中性か弱アルカリ性だと発病が減少する事から石灰資材の投入　③無病土壌で育苗によるネコブ病菌接触期間の短縮による発病軽減　④土壌水分と関係が深く排水対策の徹底　⑤畑科やさいとの輪作　⑥残渣処理の徹底などです。

◆カカニ地区

当団が導入して地域の主要換金作物に育ったイチゴですが完全に定着してカトマンドゥではカカニのイチゴとして大量に流通しています。

しかし本家本元のカカニ農場の作柄が思わしくありません。これは　①十数年にわたる連作から病菌密度の増加など連作障害　②ヒマラヤおろしの吹く寒い地形でイチゴの栽培に適さない。（一般農家の暖かい場所は技術は未熟ですが良品ができています）③イチゴ苗の老化などが原因と思われます。

対策としては　①南面傾斜で日当たりの良い暖かい、かつ熱畑への移動　②日本からの新しい苗（ウイルスフリー苗）の導入と更新などを進めたいと考えています。

また換金性の高い適作物があれば良いのですが、イチゴに匹敵する品目がなく苦慮しています。

（農業指導員　土屋興亜）

◀ナムター村でのキャベツ畑の巡回指導。左はナムター村前村長、中央著者、右はこの旅者にキャベツを導入した先駆者。

◀標高2100m、ナムター村やさい栽培地帯。キャベツ、カリフラワー、大根などが栽培されている。春は菜の花が満開で対照。

▶農村部ではバスは唯一の交通手段で、屋根まで人が乗る。イチゴの出荷など物資の運搬も兼ねる。

事務局だより

▼ジャイチ

8月
- マン常務理事ネパール出張現地指導、バザー用品買付け
- 真田バザー（上田市）

9月
- 土屋農業指導員　ネパールへ農業指導支援（3P参照）

10月
- 理事協議会開催（6日）
- まるこ国際交流フェスティバル参加（上田市）
- グローバルフェスタ2006参加（日比谷公園）
- ニュースレター31号発送（1400通）
- 若林康平さん（東京都）バシファント学校7年生奨学里親引き受け
- 小山美香事務局員退職

11月
- 理事協議会開催（13日）今後の財団業務について協議
- マン・パハドゥール・シュレスタ常務理事日本事務局を退職（理事として続ける）

12月
- ニュースレター32号の編集会議
- 事務所移転

バザーご協力ありがとうございました。

ジャイチネパール▼

7月
- バシファント学校PTA役員交代
- SLC試験、15名中13名合格（合格率87%）
- バシファント学校及びカカニ学校の教師夏休み中一週間の研修実施
- ポカラ幼稚園のシスター川岡さん、カカニ学校視察（岡さん案内）
- イチゴ苗作り、大根種種作業（カカニ農場）

8月
- バシファント学校10年卒業生送別会開催、学校内サッカーゲーム行なう
- カカニ学校PTAと話し合い
- イチゴ苗植え替え作業（カカニ農場）
- ラクパ・シェルパとカカニ農場の賃貸契約を結ぶ
- カカニ学校教師1名、ポカラ幼稚園で研修

9月
- ネパール政府高官及び郡の地区教育担当官、バシファント学校視察（2P参照）
- ダサインお祭りの贈り物贈呈

10月
- サツマイモ、キウイフルーツ収穫
- イチゴにジャノメ病発症、葉が枯れる（カカニ農場）
- ネパール教育文部省、バシファント学校視察

11月
- イチゴ収穫始まる
- カカニ学校3年生カトマンズ市美術館見学
- ネパール政府へ会計報告（2005.7〜2006.6）
- 地区教育担当官、バシファント学校訪問

バシファント学校奨学里親募集

バシファント学校奨学里親の皆様		
5年生	島田基正様（長野県上田市）	藤原純子様（愛知県名古屋市）
6年生	石井泰子様（静岡県浜松市）	MLCウイメンズクラブ 代表 鈴木貴久子様（神奈川県座間市）
7年生	畔柳茂樹様（愛知県岡崎市）	若林康平様（東京都世田谷区）
8年生	㈱エヌ・アイ・エス 千場公紀様（東京都文京区）	募集中
9年生	募集中	募集中
10年生	募集中	募集中

奨学金は年間60,000円です。
皆様のお申し込みをお待ちしております。

『武士道とは』

小林栄、島田基正、小宮山宗輝共著の第三作目。軍人勅諭にみる武士道／武士道は地球を守る／武士道とは極道とみつけたりと三者が語る。定価八〇〇円（送料別）事務局まで。

物故者のお知らせ

支援者の方で、当方で把握している物故者を掲載いたします。ご冥福をお祈りいたしますと共に、今までのご支援に対し感謝いたします。

若林　助蔵様　十七年　（滋賀県）
植松　国夫様　十八年二月　（東京都）
今成　守雄様　十八年　五月　（埼玉県）
曽根　和雄様　十八年　九月　（東京都）
大蔵　盛司様　十八年　十月　（長野県）
杉浦　一明様　十八年十一月　（静岡県）
横山　直太様　十八年十一月　（東京都）
秋山　茂夫様　十八年十二月　（栃木県）
水上　士郎様　（京都府）

▲カトマンドゥから約25km。標高差300mをひたすら登る。頂上付近がカカニ農場。「精やして天に至る」世界。

お知らせ

◆古切手の収集続けています。切手の回りに五ミリの余白を残してください。
〒一五八-〇〇八四
世田谷区東玉川一-一〇-一〇
安藤雅子

◆書き損じ葉書（年賀葉書も可）集めています。
ジャイチの事務所宛に送ってください。切手に交換し、通信等に使わせていただきます。

◆ネパールの農場と学校訪問の旅は、しばらくの間中止とさせていただきます。

◆事務所移転に伴い、冷蔵庫と食品棚が足りません。もし不要のものがございましたらご連絡ください。

編集後記

事務所移転に伴い、気持ちを新たに当初の計画通り進める努力をしています。

ジャイチネパールへの送金がひっ迫していることもあり、ボランティア中心の運営にならざるを得ない状況です。時間に余裕のある方で手を貸していただける方はご連絡ください。

人と人が集ってこそ楽しさや生きがいが生まれてくるものと思います。そして、この武石に集っていただけることは、小生にとってもこの上ない喜びです。（巡）